阿波の赤ひげ　関寛斎

寛斎は何を目指したのか

阿波の歴史セミナー

令和4年7月14日

徳島学博士　坪内　強

関寛斎像

中徳島町

碑文

- 関寛斎先生は、現在の城東高校校庭の一部の場所に居を構えて以来３０年間市民の診察を行った。富者には診療費を高くし、貧者からは金をとらず俗に言う赤ヒゲ先生であった。７２才で医業を廃し、北海道開拓に向い８３才で他界された。

- そして過ぎし４０年の徳島時代の生活を回顧して

  - 「世の中を　わたりくらべて今ぞ知る
    阿波の鳴門は　波風ぞ無き」

幕末から明治にかけて激動の時代を駆け抜けた関寛斎という医師がいた。

「人たる者の本分は、眼前にあらずして、永遠に在り。・・・

目先のことに囚われるのではなく、永遠を見据えることだ。」

高田郁
あい
永遠に在り
Kaoru Takada
角川春樹事務所

歌芝居 2020 石川さゆり『あい 永遠に在り』

石川さゆり『あい 永遠に在り』で、内博貴と共演

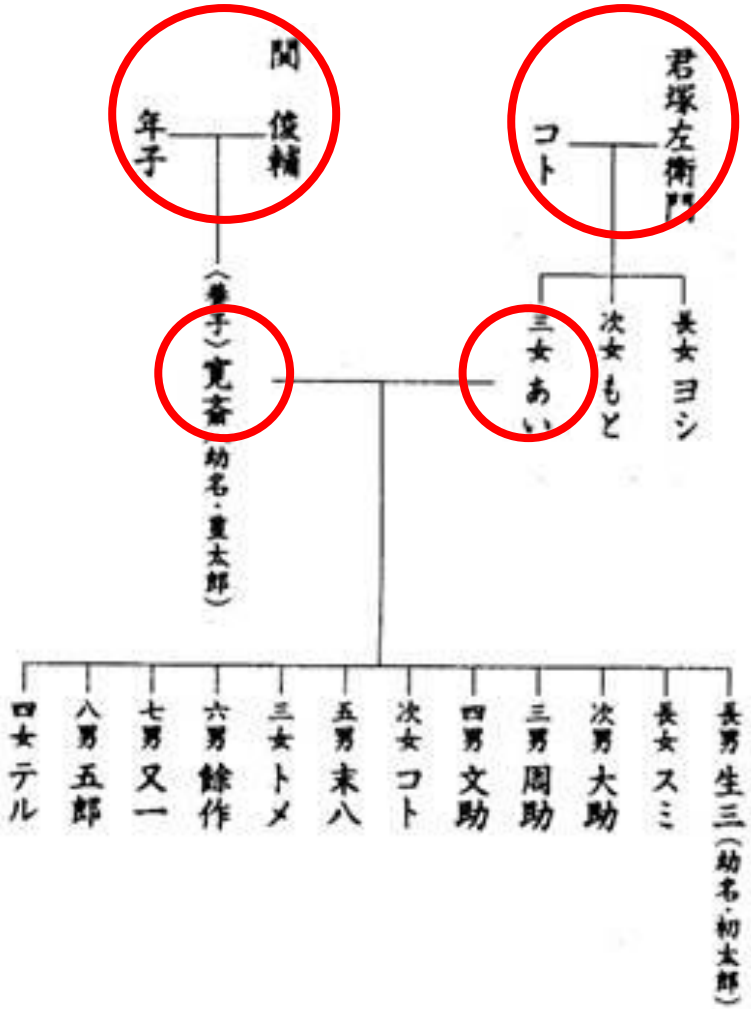
- 寛斎は、寛斎は現在の千葉県中村の吉井家に生まれ、関家の養子になる。
- 順天堂で医学を学び、長崎でオランダ人医師ポンペに師事
- 文久２年、徳島藩の藩医になり蜂須賀斉裕を看取る。

- 慶應４年（1868）、戊辰戦争が起こり、奥羽出張病院の院長として、負傷者が出ると敵味方の区別なく治療した。
- 寛斎は「医をもって人を救い、世を救う」「患者に上下はない」を信条としていた。
- 戦後、徳島で開業医になるが、貧しい家に病人が出るとすぐに出かけて治療。人々は寛斎のことを「ゲタばきの名医」と呼んで敬愛した。
- そして、72歳の時、北海道開拓を志し、斗満（とまむ）原野に入植し厳しい労働と医療にあたる。
- 1912年（大正元）陸別で没する。

関 寛斎の経歴

西暦	満年齢	
1830	0	上総国山辺郡中村（現在の千葉県東金市）の農家吉井家の長男として生まれる。
1843	13	前之内の関俊輔と正式に養子縁組。
1848	18	佐倉順天堂に入学。佐藤泰然に師事。
1852	22	佐倉順天堂を修了し、前之内で開業。結婚。
1856	26	銚子で開業。
		この頃、コレラ流行し、防疫活動。
1860	30	長崎留学。オランダ人医師ポンペに師事。
1863	33	徳島藩の御典医になり、徳島に移住。
		御典医として活躍。
1868	38	明治維新。戊辰戦争に軍医として従軍。奥羽出張病院頭取。
1869	39	徳島藩医学校一等教授、病院長に就任。
1872	42	山梨病院長。検梅法を発表して実践。
1873	43	徳島へ戻り、関医院開業。
1875	45	徳島新聞に養生心得を発表。
		町医者として徳島で活躍。貧者の無料診療や種痘にも取り組む。
1902	72	北海道の斗満原野（現陸別町）へ移住。
		農地開拓と町医者として住民の診療を行う。
1912	82	子孫から財産相続訴訟を起こされる。
1913	83	服毒自殺。

寛斎誕生


長女 ヨシ
次女 もと
三女 あい
君塚左衛門
コト
長男 生三（幼名・初太郎）
長女 スミ
次男 大助
三男 周助
四男 文助
次女 コト
五男 末八
三女 トメ
六男 餘作
七男 又一
八男 五郎
四女 テル
（華子）寛斎（幼名・重太郎）
関 俊輔
年子

寛斎生誕の地　東金市東中

寛斎九十九里浜に生誕

- 千葉県の中村周辺は九十九里の砂浜に沿う湿地帯をなし、俗に中須賀という名で呼ばれ、穀物のとれない不毛の地域とされていた。
- さらに、江戸時代には旗本・与力らの知行地が入り組んで、分断支配するという形になっていたため、農民への搾取がきびしく、生活の困難はひどいものであった。
- 当時、この地域の農民は、**蕪かじり**と呼ばれた。寛斎は、文政13年（1830）、上総（かずさ）国山辺郡中村（千葉県東金市東中）の農家・吉井佐兵衛・母幸子の長男として生まれ、幼名を豊太郎といった。
- 母は非常に心の優しい人で、寛斎は愛情一杯に育てられていたが、彼が3歳のときに母を亡くした。
- 母の姉、年子の嫁ぎ先は、**儒家関俊輔**（素寿）で、子供の居ない関夫婦に寛斎は預けられ、寛斎が13歳のとき養子になった。
- 養父は、「錦のような子供を育てよう」との理念のもとに私塾・製錦堂を開き、近所の子弟たちを教育していた。

佐倉順天堂に学ぶ

- 嘉永元年（1848）、関寛斎が18歳のときに、佐藤泰然（たいぜん）が天保14年（1843）に開設した佐倉順天堂に学ぶようになる。
- 寛斎の実家の経済状態は悪く、仕送りは一年で途絶えた。そのために、寛斎は、調合所や病院の掃除などの雑用をこなして、学業を継続させてもらい、周囲からは「乞食寛斎」などと呼ばれる。
- 寛斎の優秀さは、次第に泰然に認められ、入門3年目の嘉永4年（1851）に、泰然の助手となって手術を手伝い、その実力が認められて泰然の代わりに手術を行った。
- また、寛斎が記録した「順天堂外科実験録」には、当時の麻酔無しでの日本最初の膀胱穿刺術や帝王切開手術、術後病理解剖の事例などが克明に記述されている。
- 嘉永5年（1852）、寛斎22歳のとき、故郷の「前の内村」で仮開業して、順天堂に通った。このとき“寛斎”と改名。

郷里前之内～銚子時代

- 1852年(嘉永5)、父俊輔の強い希望もあり、順天堂での4年間の修業を終えて帰郷する。
- その12月25日、両家の親の取り決めた寛斎と君塚あいとの祝言が執り行われた。関寛斎22歳。君塚あい17歳。
- 君塚あいは、寛斎と同郷の上総国山辺郡の前之内村で、君塚左衛門・コトの三姉妹の末子として生まれた。
- 「君塚家」は、代々農を営む家で、読み書きに明るい当主が続いて百姓代として村の運営にも関わったため、前之内村では一目置かれる存在だったといわれる。
- 関俊輔は、左衛門の兄にあたり、寛斎は、あいの義理の従兄妹にあたる。
- 安政元年（1854）2月に長男・生三(初太郎)が東金で誕生した。

寛斎の妻あい

- あいが生まれ育ったのは現在の千葉県東金市の山村。
  耕せど耕せど豊かにならない農家出身のあいは、綿花から糸を紡ぐのが得意で、伯父の妻年子に機織りを教えてもらい上総木綿の名織手となる。
- 年子の家に通ううちに、母を亡くして叔父夫婦の養子として医者を目指している寛斎と出会う。

- 寛斎は、地元で医者を始めるが一向に患者は来ることが無かった。
  あいは、得意な機織りで生計を助けながら子を出産する。
- 上総は藍染が盛んな街で、あいも藍染の上総木綿で着物を作っていた。
- その後、徳島での藩医や町医者時代も寛斎を理解し支え続ける。
- 老境に達した頃の突然の北海道入植でも病に倒れるまで寛斎のためにと開墾に尽力する。

銚子で開業

- ほとんど患者がない寛斎は、佐倉順天堂まで出かけて様々な外科手術に立ち会ったり、師に代わって執刀することが多かった。
- 1856年(安政3) 寛斎26歳あい21歳。2月15日 泰然の推挙により銚子荒野村(現在の銚子市興野)に移転開業する。
- 銚子では、「関医院」の看板をかけたその日から患者が押し寄せて多忙を極めたといわれている。
- そして1858年長女スミが誕生する。
- 寛斎の家の近くに和歌山のヤマサ將油醸造業の浜口梧稜（ごりょう）の邸宅があった。
- 梧稜は歴史上に名を残すほどの篤志家であり、その後寛斎は、この梧稜の知遇を受けることになる。
- 安政5年（1858）、江戸にコレラが大流行した際、梧稜は寛斎を江戸の、三宅艮斎の下に派遣して、コレラの予防法を学ばせ、必要な薬品と器具を購入し、コレラの銚子への伝染を防いだ。

「隔離」でコレラ対策に成功した関寛斎

- 江戸の町では36万人がコレラで死亡した。
- 民衆が出来ることと言えば、邪気を払うために豆まきをしたり、家の前に松の飾りをつけたり、獅子舞に舞わせたり、ということだった。
- 民衆が迷信にすがる中、関寛斎はさまざまな医学書を読み込み、ある対策を実行する。それは、「病人と健康な人とを分ける」、つまり現在でいう「隔離」であった。
- 健康な者にはきれいな水や食べ物を与え、病人の排泄物からできるだけ遠ざけた。
- さらに、江戸から大量のマラリアの薬を取り寄せた。
- その薬はコレラに対しては効かなかったが、炎症を抑える効果はあった。

ポンペ来日

- 安政2年（1855年）幕府は、黒船来航により、鎖国体制に終止符が打たれ、海防の整備を急務として、長崎に「海軍伝習所」を設けて軍艦の購入と操縦の指導者派遣をオランダに依頼する。
- 1857年（安政4）入港した軍艦ヤバン号（後の咸臨丸）によりオランダ海軍の青年軍医ポンペが来日した。
- ポンペは、幕府の要請により1857年（安政4）海軍伝習所の教官として長崎に招かれる。
- ポンペにより、わが国西洋医学の系統的教育の新時代が開かれたといわれる。ポンペは幕府に要請して「長崎養生所」を開設する。
- これは我が国最初の近代的様式病院で、医学所も併設しており、学生たちはここで医学の基礎課程を学び、養生所で臨床医学を実施に学んだ。

関寛斎の長崎留学

- 梧稜は、これまでの寛斎の働き振りとその医学知識の深さから、寛斎の人物と力量を高く評価し、寛斎を経済的に支援する。
- 万延元年（1860） 3月29日二男大助誕生。寛斎は30歳。
- 梧稜は、寛斎を長崎に留学させ、長崎での和蘭軍医ポンペの下で学ぶように資金援助をした。
- そのとき佐倉順天堂から佐藤尚中が関寛斎と一緒に長崎に行っている。
- 安政4年12月から長崎奉行所で始まったポンペ教習所では、日本人の医師に基礎医学から、臨床医学、そして医事法制に至る幅広い教育が5年間なされた。

- 寛斎は、1年でこの遊学を終えるが、この間学んだことを「長崎在学日記」「ポンペ講義筆記」「朋百（ぽんぺ）氏治療記事」などにまとめ、出版した。

- これらは、当時最新最高の医療情報として、全国から高く評価された。

- 「七新薬」は、親友である語学の天才・司馬凌海が原稿を書き、寛斎が文章を校閲して梧陵の援助で出版された。

- これらの文献は現在でも当時の医療水準を知る第１級の資料と評価されている。寛斎は、当時の医療近代化の先頭を切る一人だった。

- 文久2年、寛斎は長崎から銚子に戻るが、翌年徳島藩・藩医となり徳島へ移住した。

- 梧稜は寛斎に長崎での留学の継続を勧めたが、寛斎は従わなかった。寛斎はこのことを終生後悔したという。

徳島藩主の侍医となる

- 寛斎が徳島藩主の御典医として登用されるのは文久２（1862）年に江戸藩邸においてである。
- 俸禄として25人扶持が与えられた。
- 12月１日に登用されて、12月９日に初めて「太守様拝診」して以来、戊辰戦争が勃発した最中の慶応４年の斉裕の臨終まで、厚い相互信頼の関係を持った。
- 斉裕は陸軍総裁兼海軍奉行を11月から翌年１月の辞任まで２か月ほど務めたが、世嗣茂韶を中心とする反対があって辞任する。
- 寛斎が御典医となったのは、斉裕が陸軍総裁職兼海奉行を命ぜられていた時であった。
- 文久２（1862）年は坂下門外の変、生麦事件が発生した年であり、全国各地での多事多難が報ぜられたときである。

蜂須賀　斉裕

- 斉裕は将軍家斉の22子であったが、徳島藩13代藩主の斉昌に子がなかったので迎えられて14代徳島藩主となる。
- 開国の外圧、攘夷の内情の中で、勤皇と佐幕、開国と攘夷、さらには佐幕と倒幕などのいろいろな論理が錯綜する。
- 徳島藩は「公武合体論」の立場であり、「あいまい藩」であった。
- 斉裕は「佐幕にして勤皇」、「開国派にして攘夷論者」とされ、「その思想と行動は、遠謀深慮の日和見主義だ。」とされる 。
- しかし、将軍継嗣問題では一橋派に属し、安政改革を指導する「明君」の一人に数えられていた。
- 井伊直弼が大老に就任して安政大獄が断行されてから文久２年の幕政改革が行われるまで、斉裕は専ら藩政改革による経済力の増強と洋式調練による軍制改革とにとりくんでいた。

- 阿波藩は、元来、閉鎖的・保守的な藩風であり、徳島の城中に入った蘭医は寛斎が皮切りだった。
- その彼が百姓出身の異国者でもあるというので、城中では必ずしも好意をもって迎えられなかった。
- しかし斉裕は、城中で似たような疎外状況に置かれた彼に親近感をもち、寛斎の人柄と、誠意のこもった診療ぶりに深い信頼を寄せるようになった。
- 斉裕が徳島城で「内鬱」する気持ちを「酒」にまぎらして激動の局外で生活する相手に関寛斎がなる。

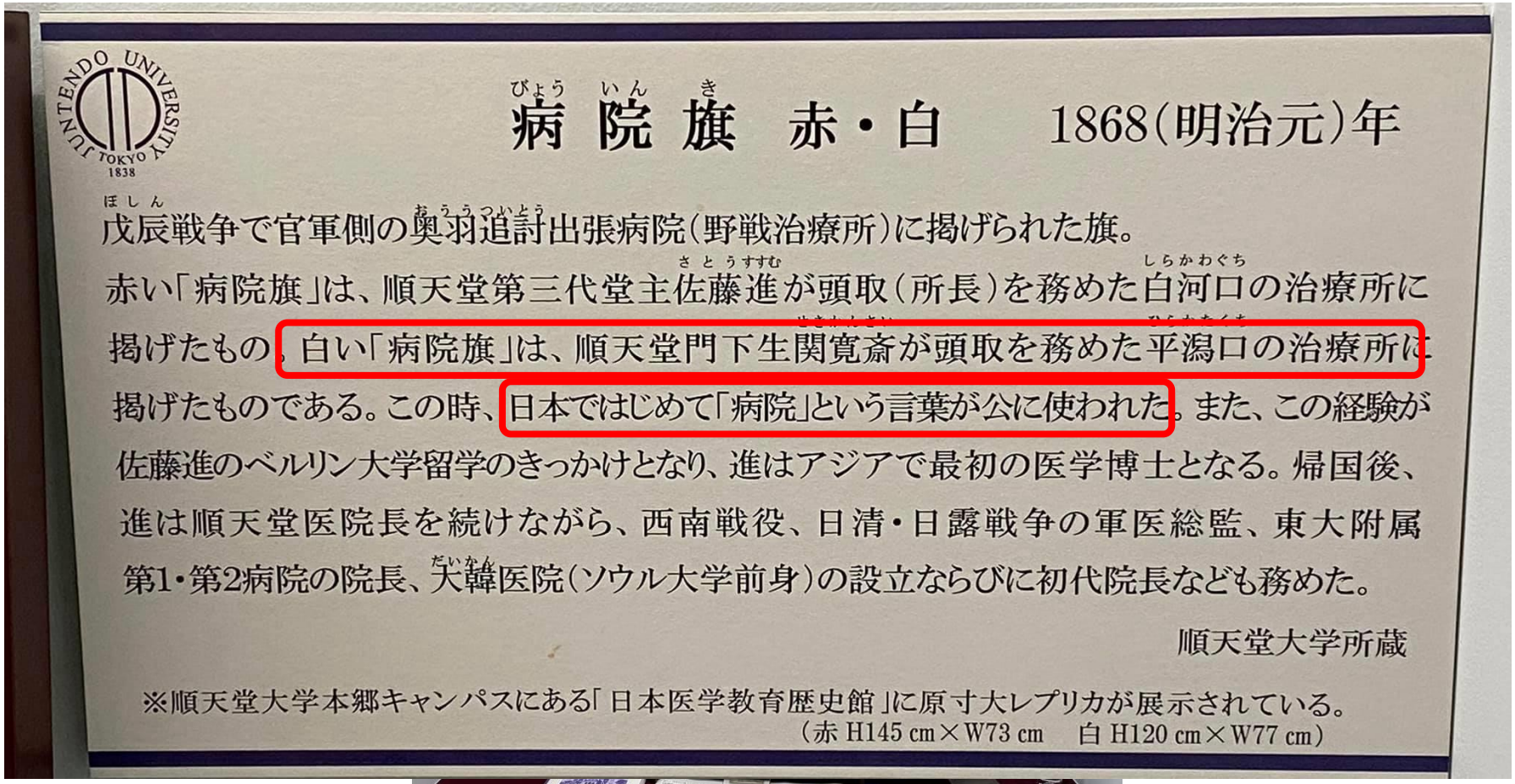
- 寛斎は徳島に土着することを覚悟して文久３年、上総・下総での親戚知己との別れや家財等の整理を済ませる。
- 銚子と上総よりの荷物27個を、広屋吉右エ門の廻船に輸送を依頼して、妻や子を連れて江戸を出発し、大阪、そして徳島に着き富田裏掃除町の借宅に落ち着く。
- 「五月九日、両殿様御目見。十六日門人耕庵・玄碩・慎吾・三郎・栄輔・良助・良庵・戈司と共に夜会ヲ始メ内科書ヲ講ズ。」

- 徳島での生活を使命観をもって始めた矢先、「五月十八日　初メテ御番出勤。荷物不残流失之届。大小三十箇、調合諸道具入込等、時価三百両」という悲報が届いた。
- 寛斎は妻と共に築いた全財産を失ってしまった。

- 全財産を流失させてしまった寛斎は藩よりの「前借」や梧稜の支援によって生活をたて直して、斉裕の御典医としてと同時に、労咳であった賀代姫の病死を看取るなど、斉裕の信頼を厚くする。
- 長州征伐・再征と続く時期に、斉裕は長州再征には反対で、病気を理由に出征を固辞し、代わって茂韶が出陣し、稲田邦誠が兵800人で従った。
- 薩長同盟が成立し、西南雄藩連合による倒幕が具体化しつつあった。
- 大政奉還、将軍慶喜よしのぶの辞官、納地が決定されて、鳥羽伏見で戦闘が勃発した慶応４年１月３日には斉裕は徳島城下で危篤に陥り、１月６日に没する。享年48才であった。
- 万年山墓地に「故阿淡二州太守源戴公之墓、慶応４年戊辰正月13日薨」とある。

- 斉裕は、その立場のあいまいさから「御内鬱」と記されるような精神状況に追い込まれ、その鬱積を「酒」でまぎらわした。
- 英明さを持つ人物であっただけに「アルコール中毒症」となり死亡に至ったのである。
- 戊辰の激動の中での徳島藩主蜂須賀斉裕の「臨終」があいまい藩徳島藩の立場を象徴している。
- その臨終の場に御典医の関寛斎がおり、封建的な身分社会の場で、冷徹なまでの「容態の心覚」を記録している。
- 「大名の臨終」がこれほど微細に記録されていることは稀有であり、寛斎の医師としての力量と几帳面な性格、記録能力の優秀さを示している。
- その後、茂韶が１月17日に就封し、松平姓から蜂須賀姓に１月27日に復した。
- 蜂須賀茂韶は寛斎を供に京都へ向かい、京都二条の藩邸に着く。

- 寛斎は官軍への参加が命ぜられ、梯津守組銃隊100人と共に蒸気船で江戸に向かい品川に着く。
- 講武所を拠点とし、上野彰義隊との戦闘での各藩の負傷者の処置を行う。
- この時の戦傷者への処置の優秀さが大村益次郎に激賞され、奥羽出張病院頭取に命ぜらる。
- 戊辰戦争で徳島藩が官軍に加わると、徳島藩の銃隊とは別れて、日本での最初にして本格的な野戦病院長として大活躍する。
- ６月14日には品川を出艦し、平潟港に着き、平潟地福院を病院として臨戦態勢に入った。野戦病院への総入院273人、患者総数10,252人であった。
- これらの治療を寛斎を頭取とする13人の医師団で行った。その総費用は8,340両であり、寛斎に100両の下賜金が与えられた。



JUNTENDO UNIVERSITY TOKYO 1838

病院旗　赤・白　　1868（明治元）年

戊辰戦争で官軍側の奥羽追討出張病院（野戦治療所）に掲げられた旗。
赤い「病院旗」は、順天堂第三代堂主佐藤進が頭取（所長）を務めた白河口の治療所に掲げたもの。白い「病院旗」は、順天堂門下生関寛斎が頭取を務めた平潟口の治療所に掲げたものである。この時、日本ではじめて「病院」という言葉が公に使われた。また、この経験が佐藤進のベルリン大学留学のきっかけとなり、進はアジアで最初の医学博士となる。帰国後、進は順天堂医院長を続けながら、西南戦役、日清・日露戦争の軍医総監、東大附属第1・第2病院の院長、大韓医院（ソウル大学前身）の設立ならびに初代院長なども務めた。

順天堂大学所蔵

※順天堂大学本郷キャンパスにある「日本医学教育歴史館」に原寸大レプリカが展示されている。
（赤 H145 cm×W73 cm　白 H120 cm×W77 cm）

順天堂大学医学部附属　順天堂医院

検梅法

- 1869年(明治2)2月28日五男末八誕生。
- 3月3月、藩立徳島医学校を創設して校長に就任。また藩病院の開設など医師の育成事業に尽力する。
- 翌年には、徳島藩巽たつみ浜医学校教授治療所長となるが、不幸な出来事や宮仕えの苦しさなどから、退職して一度徳島を去る。
- 寛斎は上京して海軍病院勤務という辞令を受け取り、検梅法の実施に取り組んだ。
- 寛斎は、梅毒の恐ろしさと社会的弊害の深さとを痛感していた。
- しかし、その提案は上司の容れるところとならず、彼はこれ以上の出仕は無意味として辞表を出し、検梅の訴えを『新聞雑誌』に発表した。
- 梅毒の病原体スピロヘーターパリダがホフマンらによって1905（明治38）年に発見されたのちも、有効な対策はなお確立されず、この陰湿な社会病は、日本固有の売春制度とを土台として、抗生物質が使われるようになるまで、深く浸潤をつづけた。

山梨病院長として

- 寛斎は海軍病院辞職を最後に、官途に見切りをつけようとした。
- しかし、新設される山梨病院の長として、検梅などを実践してみてはどうか、と寛斎は勧誘された。
- 彼はこれを一年の期限つきで受け、1872（明治5）年、甲府に赴任し、新病院を移して一般診療の傍ら、さっそく週一度の検梅制度を実行に移した。
- この後を追うように民部省も翌年、東京吉原などで検梅所を開設する。樋口一葉が『たけくらべ』の中に「検査場」と書いているのがこれである。
- 寛斎はさらに、順天堂以来の持論である種痘所を１０か所に設けて天然痘防疫に努めた。
- また、医生教育、在村医師・産婆・鍼医・薬屋の指導など、今でいう地域ぐるみの医療近代化と水準向上とに全力を尽くし、人々の深い信頼を得た。
- 約束の一年でこの仕事をやめ、再び徳島に帰った。

関寛斎屋敷

明治5年絵図

武士を捨てる

- 明治6年徳島に戻った寛斎は住吉島村で一開業医となり、翌年徳島裏の丁に移住、医院を開業した。現在の城東高校の一角に当たる。
- 士籍俸禄ともに奉還して 一平民となり、以後約 30 年間この地に住む。
- 寛斎は、急患があれば、距離や時間を厭わずに出かけ、貧者からは治療費を取らず、「関大明神」と崇められた。
- 徳島では、寛斎は広大な医院と屋敷を構えていた。各地からの多くの門弟を抱え、多くの患者が詰めかけたため、屋敷前の道が「関の小路」と呼ばれた。
- 1874年2男大助14歳で夭折。 6月六男餘作誕生。8月五男末八5歳で夭死。
- 1876年(明治9) 七男又一誕生。 1877年(明治10)八男五郎誕生。 1881年(明治14) 四女テル誕生。

正三を嫡廃

- 子供達のなかで、寛斎の後半生に消しがたい苦悩を刻みこんだのは、長男　生三の存在だった。彼は1854年、郷里前之内で仮開業した寛斎24歳のときに生まれた。
- 生三は、父の長崎遊学に当たり、6歳で東金の祖父母に預けられたまま、父母と離れての生活を続けた。9歳のとき順天堂に入門、1869年、15歳で、大学東校(東大医学部の前身)に学んでいる。
- しかし、その翌年から肺を患い、山梨病院長当時の父のもとで療養した時期もあったが、快復後は、1874年、20歳で再び大学東校の後身、東京医学校に再入学した。
- そして三年後、西南役に際し大阪に行き、翌年再び上京して佐藤尚中にも師事した。
- その後、東京医学校から慶応義塾医学所を経て、徳島で医師となる。

- 寛斎の勧めに従い嫁を娶ったが、一言の相談もなしに離縁して家から追い出した。
- 生三に対する寛斎の怒りは冷めやらず、あいや年子の懸命の取り成しにも耳を貸さずに生三を廃嫡とした。
- 廃嫡、という不名誉が息子の人生に暗い影を落とすことを憂い、あいは幾度も懇願を試みたが、無駄であった。
- その後、生三は自暴自棄となったのかトラブルを起こし、あいを訪ねて25円の無心をしている。
- これ以後、父と子との対立は相当深刻なものがあった。
- その後、正三は結婚し、二児を得て、通町に医院を開く。
- 明治23年(1890)37歳となった正三は、寛斎とやっとのことで和解をする。
- そして、正三は貧民救済運動や同和運動に身を投じて大活躍をする。

自身が設立した孤児院の前で、子供を抱く生三

新しい決意

- 一時の穏やかな生活だったが、1895年 13歳でテルが夭死。
- 翌年1月、浜良平に嫁いでいた長女スミが心臓発作で急死する。
- 蘭法もすっかり時代遅れの学問となった。
- 徳島にもドイツのより進んだ医術を持つ医師や設備の整った病院が次々とできた。
- 寛斎は町医として貧しい家庭の子供達に無料種痘を続ける。
- 寛斎は、北海道の又一の所へ様子を見に行った後、三井物産に勤めている周助に家督を譲り、蜂須賀斉裕から下賜された鼓を打つようになる。
- 1899年(明治32)1月4日 古稀(数え年70歳)の祝い。
- そして1901年(明治34) 寛斎71歳・あい67歳、金婚祝賀を受ける。
- 寛斎は金婚の祝いで、あいとともに北海道に入植することを発表する。

金婚祝賀会で詠んだ自作の漢詩

- 人生百歳期
  七十是中途
  老健旦休怪
  天真保我躯

- 人生百歳ヲ期ス
- 七十是レ中途ナリ
- 老健シバラク怪シムヲヤメヨ
- 天真我ガ躯ヲ保ツ

又一　北海道開拓

- 明治 25年、四男又一（16 歳）を札幌農学校に入学させた。
- 又一は石狩郡樽川に 32 万 4 千坪（108 ヘクタール）の土地貸付を受ける。
- この土地の払い下げは、明治 25年制定の「予定存置法」による。
- 樽川の貸付地には 明治 27年 8 戸、明治 32年 23 戸が入植。
- 明治 34年頃より樽川の関農場 は順次、小作人に任せる。
- 北海道の奥地十勝～釧路にまたがる斗満原野と上利別1,011ヘクタール(約306万坪)の貸付許可を得て開拓の準備に入る。
- 明治 35年札幌農学校卒業。
- 卒業論文「十勝国牧場設計」（陸別原野一帯の気象条件などを科学的に精査）を発表。
- 又一は卒業すると十勝の陸別斗満の土地貸付(1377 ヘクタール)　450万坪を受け入植。

寛斎夫婦　北海道に入植

- 明治35年寛斎夫婦も北海道に入植。
- すでに72歳の高齢になっていた。寛斎は開墾に精を出すが、冷害などに見舞われ、作物は少しも稔らなかった。
- あいは、渡道後はすこぶる健康で、自ら畑に出て鍬を取り、一日に一銭たりとも多く貯えて、又一の手元に送り牧場の資本を増加せんと、熱心に働いた。
- 苦労が祟り、あいは心臓病にかかり、発作がおこるようになる。

- 「この病は、とても全治は難しいのでは！」と、悟り、前々から胸中に秘めていた決意と、死後の希望を切々と寛斎に伝えた。
- ー　葬式は決して此地にては執行すべからず。牧場において貴方が死する時に、一同において埋める際に、同時に行うべし。ー
- その後の愛の死にも寛斎は挫けず、豊頃に入植した二宮尊親たかちか（二宮尊徳の孫）を訪ねて、この農場が入植者に土地を分け与えているのを知り、そのやり方に変える。
- これにより斗満の開拓は著しく進んでいく。

旧陸別町駅前に建つ「関寛翁之像」

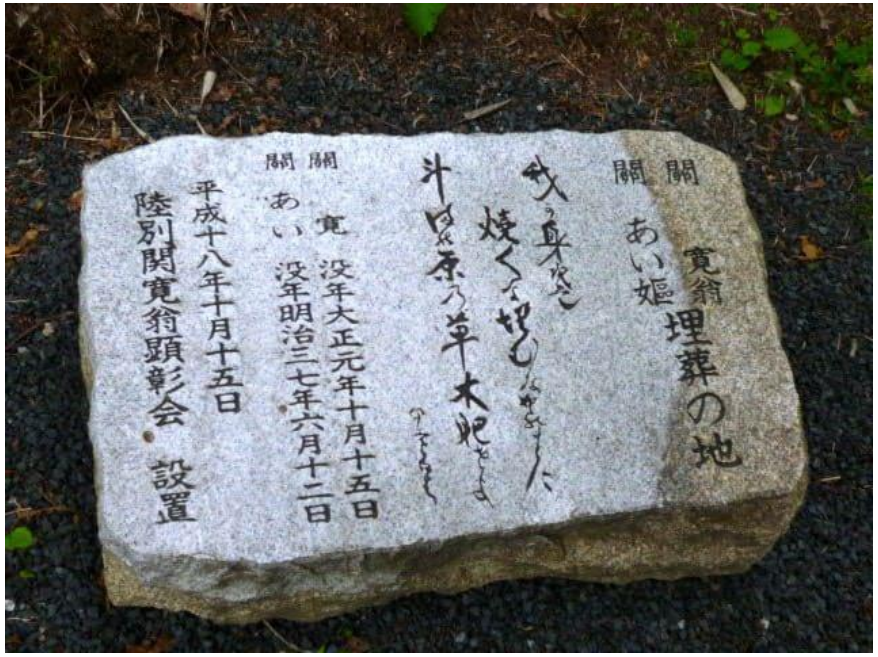
寛斎の突然の死

- 1912年(大正元)82歳 蘆花の協力を得て、寛斎自身実践の心身鍛錬法をまとめた「命の洗濯」を東京警醒社より発刊。
- 同年10月8日に、三男餘作が網走監獄の医官として着任する。
- 寛斎は、トルストイと二宮尊親に深く心酔しており、小作人に農地を解放することを希望したが、家族に強く反対されて苦悩の末に、大正元年10月15日、服毒自殺する。82歳。
- 自殺の原因としては他に、明治天皇崩御と乃木希典の殉死、孫(長男生三の息子)からの財産分与をめぐる訴訟、寛斎自身の心身の衰えなどが考えらる。
- 寛斎の死後、4,000㌶を超える広大な農場のほとんどが小作人に解放された。
- 今日、陸別町では、陸別開拓の祖としてその功績を称えて、銅像・記念碑・資料館や記念公園など建設している。

- また、その偉業に敬意を表して、陸別国民健康保険病院は、「関寛斎診療所」と名付けられている。
- 関寛斎あい夫妻は、あいの遺言どおり、陸別町を見渡せる小高い丘に一緒に眠っている。

［寛斎辞世］

- わが身をば焼くな埋むなそのままに斗満の原の草木肥やせよ（八十三老白里）



人生の終焉　理想郷を求めた寛斎

- 寛斎は、医者としての社会的地位もあり、経済的にも満ち足りた生活の中で、何故すべてを投げ捨てて、北海道開拓の覚悟をしたのだろうか。
- 寛斎自身が「創業記事端書」1910（明治43）年の中で次のように書いている。

- 明治三十四年には、我等夫婦に結婚後五十年たるを以て、児輩の勧めにより金婚式の祝いを心ばかりを挙げたり。
- 然るにかかる幸福を得たるのみならず、身体健康、且つ僅少なる養老費の貯えあり。
- 此れを保有して空しく楽隠居たる生活し、以て安逸を得て死を待つは、此れ人たるの本文たらざるを悟る事あり。

寛斎の生き方

- 佐倉で記録した『順天堂外科実験』、ポンペに学んだ『朋百氏治療記事』『七新薬』は、当時の医学に係る第一級の資料である。
- 順天堂での先駆的な種痘奉仕、梧陵が主導した銚子のコレラ防疫の成功などの体験、
- 養父から受けた儒学の素養、
- 「人を救い世を済（わた）す医に若くは莫し（しくはなし）」との泰然の訓え、
- 梧陵の「人たるの道」への導き、
- ポンペのヒューマニズム医療教育、

等は、生涯の生き方の指針となったと思われる。

- 維新に際し、官賊の別なき施療行為は赤十字精神の先駆とされ、その業績は西郷隆盛からも高く評価された。
- しかし、寛斎はその立場を捨て、その後30余年にわたり、徳島にあって庶民への医療と社会奉仕に力を尽くした。

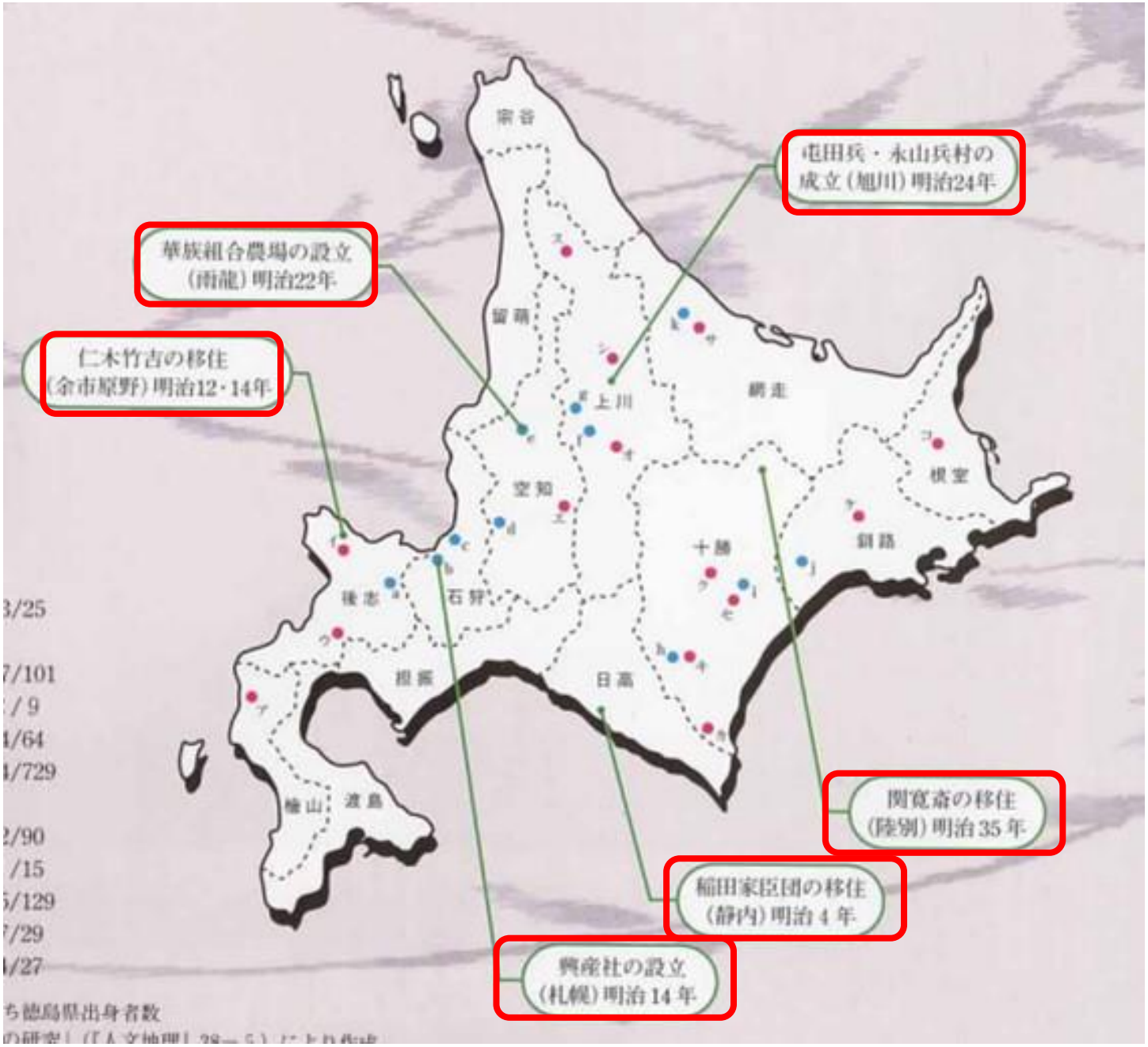
寛斎の医学思想

- 彼の医学思想と実践は、その著『養生心得草』にも見られるように、養生（健康管理と予防）、運動（積極的鍛練）、医療（適切な科学的対処）の総合性を重視した、現代保健思想にも通ずるものであった。
- 彼の「世を済す」社会貢献は、医療を超えて維新後の旧武士たちへの救済、各戦役時の傷病兵慰問など多岐にわたった。
- その極は晩年、全資産を投じて理想の「農牧村落を興す」、北海道開拓事業への転身であった。
- やがて目指す自作農創設のため、彼は徳富蘆花を通してトルストイ主義に近づき、「平等均一の風」実現の農地解放へと向かう。
- しかし家族との対立などによりそれを果たせず、死を選んで波乱の生涯を閉じた。

番外

番外Ⅰ　徳島県人の北海道入植

- 道内移住者の数は、1882（明治15）年から1935年までで1万8000戸、5万人という記録が残っている。
- この数は東北・北陸の各県に続く46都府県中12位の数字になる。
- このうち屯田兵制度による徳島県からの入植者は329戸・1698人。石川県、香川県、福岡県に次いで多い人数である。
- 稲田家家臣の入植に続き、仁木竹吉(那賀町)、滝本の興産社(板野郡)と入植が続いた。
- その後、華族組合雨滝農場、屯田兵の永山兵村の成立と続く。
- 関寛斎が入植したのはその後、明治35年のことだった。


屯田兵・永山兵村の
成立（旭川）明治24年
華族組合農場の設立
（雨龍）明治22年
仁木竹吉の移住
（余市原野）明治12・14年
関寛斎の移住
（陸別）明治35年
稲田家臣団の移住
（静内）明治4年
興産社の設立
（札幌）明治14年
宗谷
留萌
上川
網走
根室
空知
釧路
十勝
後志
石狩
胆振
日高
檜山
渡島

大正7年　最近10年間　北海道来住者
徳島県10位　18,144人

表1　大正7年(1918)刊『北海道百番附』の中の「府県来住番付」

府縣來住番附
（大正五年迄十年間）

横綱	七一、三三六人	宮城縣
大關	五七、九一六人	富山縣
關脇	五五、三三五人	秋田縣
小結	四一、四三三人	福島縣
前頭	三九、〇一四人	山形縣
同	二〇、二二五人	岐阜縣
前頭	一四、五六〇人	東京府
同	一〇、七八五人	愛媛縣
同	七、三九二人	山梨縣
同	七、〇九〇人	鳥取縣
同	六、〇六六人	茨城縣
同	五、六八四人	高知縣
同	五、一一三人	岡山縣
同	四、七八一人	栃木縣
前頭	四、一一五人	靜岡縣
同	三、九一〇人	群馬縣
同	三、五七九人	福岡縣
同	三、二六四人	大阪府
同	三、〇二七人	山口縣
同	二、五七五人	京都府
同	一、九二七人	大分縣
同	一、六七四人	鹿兒島縣

後見
六九一、一〇三人
最近十年間
本道來住者

横綱	六二、二二三人	青森縣
大關	五五、五二八人	新潟縣
關脇	四一、五五一人	石川縣
小結	三九、七二五人	岩手縣
前頭	二四、四二九人	福井縣
同	一八、一四四人	徳島縣
前頭	一二、六一八人	香川縣
同	九、七八四人	廣島縣
同	七、三六一人	愛知縣
同	七、〇二〇人	兵庫縣
同	五、九〇五人	滋賀縣
同	五、三三三人	奈良縣
同	五、〇四四人	長野縣
同	四、五一三人	三重縣
前頭	四、〇六九人	和歌山縣
同	三、六二八人	千葉縣
同	三、三九四人	神奈川縣
同	三、二一〇人	埼玉縣
同	三、〇二二人	熊本縣
同	二、三七八人	長崎縣
同	一、七八五人	佐賀縣

行司
九人
四人
朝臺灣鮮

勸進元
三〇人
三〇人
沖縄縣
樺太廳

徳島県人の北海道入植と藍作

- 徳島県人が新天地北海道の開拓にあたって大きなよりどころとしたものは藍作・製藍事業で あった。
- 灌漑用水を必要とする米作りが道内に普及するのは、 明治中期以降であり、北海道開拓の初期におけ る農業の主体は畑作農業であった。
- この意味では、畑作農業である藍作を得意とした徳島県人にとっては、藍業は北海道開拓に取り組む大きな 武器にもなった。
- 藍作にはじめて取り組んだのは、庚午車変の後、日高の静内地方に移住した稲田家家臣団で あった。
- 明治4年、6月静内郡において葉藍が 試作され、明治12年より本格的に藍の製造に 乗り出した。北海道の開拓使は、 殖産興業策の一環として藍業にも注目し補助金 などにより支援した。

蜂須賀農場

- 明治19年「北海道土地払下規則」が公布されると、華族や政商・官僚 たちは競って大農場の開拓に乗り出した。
- 明治22年　公爵三條実美と侯爵蜂須賀茂詔・菊亭修季の三人は、雨龍郡に1億5000万坪の貸付を受け、華族組合雨龍牧場を設立。
- この後中心人物であった蜂須賀茂詔は、新たに約1800万坪の官有未開地の貸し下げを受け、蜂須賀牧場を開設した。
- はじめ小豆･大豆･小麦などが中心であったが、次第 に米作に転換し、明治30年代の後半には経営収支は黒字に転じて経営規模を 拡大し日本における代表的大牧場にまで成長していった。
- しかし、同時に小作料をめぐる問題も次第に表面化し、大正9年蜂須賀農場で最初の紛争がおこったのをはじめ、全国的な小作騒動の激化にともない、昭和七年頃まで争議が頻発した。
- 昭和22年、農地解放により、蜂須賀農場は解散した。

滝薬師前の井上不鳴の石碑

番外Ⅱ　徳島藩医　井上不鳴

- 1810年(寛斎より20年早い)　淡路島の洲本で生まれ、藩医であった井上玄貞の養子となった。
- 文政１２年（1828年）、１８歳で京都に留学し、蘭医・小石元瑞のもとで医術を学び、かたわら頼山陽から漢詩文を学んだという。
- 天保１１年（1840年）、前川町中洲に居宅を賜り、以後はここに住んだので、のちに「不鳴（なかず）」と号したともいわれる。
- 弘化３年（1846年）、長崎に遊学し、３年間にわたり西洋医学の種痘術と産科を学んで帰国した。
- このとき産科の器具を持ち帰り、多くの難産を救っている。
- また、嘉永２年（1849年）以降、藩内各地において種痘を行った。これが四国における種痘の最初であるとされている。
- 不鳴が種痘を施した人数は、１万人近いと伝えられる。

- 安政６年（1859年）、再び藩主に従って江戸へ上り、横浜においてシーボルトと対面した。

- 翌年、医師御免、還俗を仰せつけられて士籍に入り、藩命によって九州各藩の産業を視察し、農業・水利・製塩等の産業開発に尽力した後、明治２年（1869年）に致仕し、隠居している。これは開国論を唱えたためともいわれる。

- その後、明治３年（1870年）寛斎が創設した徳島医学校一等助教に任ぜられ、明治１５年（1882年）には７１歳で、編集役兼女学校御用係となり、余生を教育に尽くした。

- 老年に及んでも、気力は少しも衰えず、公務の合間には文墨を楽しみ、悠悠自適の生活を送った。
  明治２５年（1892年）、81歳で没。

- 大滝山の麓、滝薬師の前に碑があるが、空襲により焼けて碑文は読み取れない。